



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

善よき行おこない

私達わたしたちは誰だれもが幸しあせを求もとめています。お釈迦しやかさまは、王子おうじの生活せいかつを投げ捨すてて苦行生活くぎうせいかつに入はいられました。これは幸しあせを捨すてられたような印象いんしやうがあるかもしれませんが、それは違ちがいます。お釈迦しやかさまは不変ふへんの幸しあせを求もとめて修行しゆぎやうに入り、真理しんりを悟さとって、本当ほんとうの幸しあせを体得たいとくされたのです。それを多おほくの人ひとに広め、真摯しんしに実行じつこうすることを勧めすすめられたのです。それが菩薩行ぼさぎやうです。

古代ギリシアの哲学者てつがくしや、アリストテレスもその著書ちよしよの中なかで言いっています。

「我々われわれの達成たっせいせんとするあらゆる善よきものの中なかの最上さいじやうのもの



のは何なんであろうか。その名目めいもくについては、大概たいがいの人の答こたえはほぼ一致いっちする。すなわち、一般いっぱんの人々ひとびとも、たしなみある人々ひとびとも、それは幸福こうふくにほかならないのである。だが、ひとたび幸福こうふくとは何であるかという点てんになると、人々ひとびとは互たがいにその見解けんかいを異ことにしている」

そして、アリストテレスは、快樂かいらくの生活せいかつを吟味ぎんみし、蓄財ちくざいの生活せいかつを吟味ぎんみし、また名誉めいよある生活せいかつを吟味ぎんみし、結局けっきょくそれらが最上さいじょうのものでも、究竟きうきようのものでもないことを明あきらかにして、結論けつろんとして、「真しんの幸福こうふくとは徳とくを身みにつけるべく日々行動こうどうし、徳とくに満みちた人生じんせいを生いきることである」としています。お釈迦しゃかさまの教えおしと相似そうじしています。

以前いぜん、月刊誌げっかんし『PHP』で『わたしの幸福論こうふくろん』という特とく



集しゅうがありました。その中なかに『ゲゲゲの鬼太郎きたろう』の作者さくしやとして有名な水木みずきしげるさんが登場とうじようされ、「《幸せしあわ》なんていう言葉ことばはない方がいい」と言いっていました。

水木みずきさんは戦争中せんそうちゆうに徴兵ちゆうへいされ、ニューブリテン島とうのラバウルおくへ送おくられ、そこでマリアに雇かかりました。すぐに野戦やせん病院びやういんに収容しゆうようされたのですが、運悪うんわるく、その病院びやういんが爆撃ばくげきを受け、左腕ひだりうでをなくしてしまいました。片腕かたうでを失うしなった水木みずきさんは完全かんぜんに前線ぜんせんから後退こうたいし、島民とうみん達との長閑のどかな生活せいかつが始はじまりました。そこにはトライ族ぞくという部族ぶぞくがいました。彼らかれは水木みずきさんに非常ひじように親切しんせつでした。水木みずきさんはトライ族ぞくとすぐに仲良なかよくなり、彼らかれの自然しぜんな暮らくしぶりに感心かんしんしました。また、親おや子の愛情あいじよう、友人ゆうじんに対すたいる思おもいやり、隣人りんじんに対すたいる振ふる舞まいを見みるにつつけ、彼らかれの日常にちじようの暮らくしの中なかには、空くう



氣のように「幸せ」が充滿しているのを感じました。

水木さんは言います。

「おそらく彼らの生活の中には《幸せ》という言葉はないだろう。我々日本人の生活には《幸せ》という言葉がよくでてくる。また、みんなが《幸せ》を求め、『もっと幸せになりたい』と叫び、人生をいじくり回す。これがいけない。自然の流れに身を委ねて、トライ族のように生きた方がいい。《幸せ》なんていう言葉はない方がいいんだ」

そんな水木さんですが、その著書『水木サンの幸福論』の中で、長年世界中の幸福な人と不幸な人を観察してきて、見つけた幸福になるための条件を書いています。

「第一に他人と比べない、競わない。他人と比較するから幸せだとか、不幸せだとか、もっと幸せになりた



いぐとなる。だから比べてはいけない。人生の成功とか栄
誉とか、勝ち負けとかを目的としてはいけない。そういう
ものを得られたら幸せとか、得られなかったら不幸せとか
は関係ない。とにかく毎日愉快に生きた方がいい。愉快か、
愉快じゃないかは自分の心が決める。だから愉快に生きた
方がいい」

また、水木さんは『ゲゲゲの鬼太郎』の作者だけあって、
「目に見えない世界を尊び、目に見えない世界を信じた方
がいい」と言います。「幽玄な世界、神秘的な世界、そう
いう目に見えない何か別の世界があるということを信じた
方が幸せになれる」と言うのです。

水木さんはドイツの文豪・ゲーテが大好きです。ラバウ
ルに文庫本の『ゲーテとの対話』を隠して持って行ったほ



どです。ゲートに関する本も書いています。『水木サンの幸福論』の中からゲートの言葉を一つ紹介します。

「人はなぜいつも遠くへばかり行こうとするのか。見よ、良きものは身近にあるのを。ただ幸福のつかみ方を学べばよいのだ。幸せはいつも目の前にあるのだ」

水木さんは、この言葉が大好きだそうです。

戦争中に南洋諸島にはラバウル以外にも日本の基地がいくつかありました。ウルシー環礁の中のフェダライという小さな島もその一つです。戦後、マーシャル・ポール・ウィーズというアメリカ人医師が、そこに調査のために赴任しました。

このマーシャル・ポール・ウィーズ氏がフェダライ島で



数カ月過ぎたところ、「まさに平和な理想郷だった」と報告しています。

「この島には一人の賢明で、優しい王さまがいて、何事によらず島民の相談相手になっていた。また、この島では子ども一人でも死ぬと島中の人が集まってその死を悼んだ。島は二つの村に分かれていたが、二つの村は大変仲が良く、漁業の収穫や農作物もいつも多い方が少ない方に分け与えていた。島民は皆、心穏やかで上品で、口喧嘩などをするところを見たことがなかった。また驚くべきことに私が数カ月間、医療その他のことに努力する姿を見て、王さまが『あなたに王位を譲ろう』と言ってきた。理由を聞くと王さまは『理由は簡単だ。自分よりあなたの方が賢人なのだから、あなたに王位を譲るのは当然だ』と言うのだ。総じ



て、島民の心には妬みや恨みや争う心、悪意が全くなく、
万事が極めて善意で運ばれていた。まさに神の御心に沿っ
たような生活であった」

ここで、天界の巨人と言われるエマニエル・スウエー
デンボルグを紹介したいと思います。スウエーデンボルグ
は「北欧のアリストテレス」また「レオナルド・ダ・ヴィ
ンチを凌ぐ巨人」などと称され、かつてドイツの大哲学者
イマヌエル・カントや、国際的禅学者・鈴木大拙等が賞賛
し傾倒した、18世紀スウエーデンの不世出の天才科学者で
す。彼は9カ国語を駆使し、150冊以上の著作をものし、
20もの学問分野を極め、数々の先駆的発見を成し遂げまし
た。そんな彼が、ある日突然もう一つの世界に招き入れら

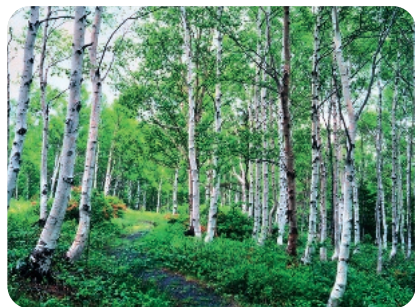


れました。そこで無数の迷える霊が蠢く地獄、天使達が奉仕する天国の光景を眼前にしたスウェーデンボルグは、それより以後の生涯（約三十年間）のすべてをこの霊界と、それを支配する聖なる摂理の探求に捧げました。

この大科学者は生きながらにして、あの世のすべてを見てきたのです。

極稀に「死後の世界に行って帰ってきた」と言う人がいます。「臨死体験」と言われるものです。魂が一旦肉体を離れることを「幽体離脱」と言いますが、スウェーデンボルグは、不思議な人物（霊界からの使者）に出会ったことをきっかけに、自由自在に幽体離脱をしてあの世に行けるようになったと言います。

その人物は「汝、あまり食を過ごすなかれ」と告げた後、



「我、汝を人間死後の世界、霊の世界へ伴わん。汝、そこにて霊達と交わり、その世界にて見聞きたるところをありのままに記し、世の人々に伝えよ」と言いました。いくら大科学者の話であってもこのようなことは誰も信じません。そのため、スウェーデンボルグは人々の目の前でその証拠を見せました。

次の話は大哲学者カントが調査して、間違いなしと認めた事例です。

ある時、ストックホルム駐在のオランダ大使が亡くなり、その夫人がスウェーデンボルグに相談に来ました。

「主人に生前、銀細工の高価な食器をプレゼントされました。主人は堅い人だから、ちゃんと生前お金を払っているはずなのに、細工職人が代金を請求してきました。領収書



があるはずですから、あの世にいる主人に、そのありかを聞いてきて欲しいのです」

スウェーデンボルグは幽体離脱をして三日間あの世に行き、大使に会いました。その後、多くの見物者を前にして、その夫人に言いました。

「聞いてきましたよ。ちゃんとご主人は七カ月前に払っているそうです。領収書もあるそうです。今からその領収書を探しに行きましょう」

スウェーデンボルグは、その夫人と見物者達を伴って2階に行きます。

「大きな机の左の抽斗の二重底のところに領収書があるそうです」

実際に抽斗を開けて、その板を外すと領収書があったそ



うです。

このような事例がほかにもたくさんあります。

スウェーデンボルグは「靈界とこの世は一つの世界だ」と言います。そして「靈界にも太陽があり、我々と同じようにそれが靈達の生命の源になっている」と言います。靈界の太陽の光は天国には多く注がれ、地獄にはほとんど届かず、地獄は暗く、じめじめとして腐臭のするところだそうです。地獄に行くのは我々が想像する通り、強欲な者、権力の亡者、犯罪者などですが、「彼らは好んで地獄に行くのだ」とスウェーデンボルグは言います。

「私は靈界で乞食の集団を見たことがある。彼らは皆人間だった時に労働を嫌い、乞食をしていた者達で、靈界でも怠惰な生活をしたがっていた。しかし靈界はそんな怠け心



を満足まんぞくさせてくれるところではない。上位じょういの天国てんごく（天国てんごくにも地獄じごくにも三段階だんかいの階層かいそうがあるそうです）の霊れいになればなるほど、霊界全体れいかいぜんたいのために役に立つ何らかの役割やくわりを忙いそしく果たはしているのが霊界れいかいである。だから怠なまけ心が染しみみついた乞食達こじきたちは、働はたらくことを嫌きらって地獄じごくの方ほうへ行くのである」

少々前置きしょうしょうまえおが長ながくなりましたが、スウェーデンボルグが最上さいじょうの天国てんごくに行いった時ときの話はなしです。

「私わたくしは霊界れいかいでいろいろな天国てんごくを見てきたが、特とくに印象いんしやうに残のこっているのは、人間にんげんの時ときに素朴そぼくで無学むがくだったが、心こころの素直すなおな者ものの天国てんごくである。彼らかれは最上位さいじょういの天国てんごくにいたのである。わたしはある時とき、未開民族みかいみんぞくの霊達れいたちが集あつまっている天国てんごくに行いったことがある。そこで彼らかれと《信しんと善行ぜんこう》について議論ぎろんした。



彼らが言っていたことで、一番強く記憶に残っているのは、彼らが盛んに強調したことで、『隣人に対して愛情深く接しよ』ということだ。彼らが言う《信》とは、天の理（※菩薩行）の本質を理解することなのだが、信ずるだけではまだ知性のレベルなのだ。それは次に意思の中に流れ入って、《善き行い》という行動になって初めて本当の本物になる。彼らはこのことをちゃんと理解していて、それを《隣人に対する愛情》と表現したのだ。彼らは人間だった時から単純明快にそういう生き方をしていた人間だったのだ。もう一つ無学だが素直な者達の集まった天国、そこで彼らはその姿も美しく輝いていた。私がここで最も印象に残ったのは、外面のものがきれいに拭い去られ、最高のレベルの霊に導かれて彼らが暮らしていたことだ。彼ら



は人間^{にんげん}だった時^{とき}には、無学^{むがく}だったとはいえ、この時^{とき}は有名^{ゆうめい}な学者^{がくしゃ}などよりよほど高い知恵^{ちえ}に満ちていたのである。霊^{れい}的な世界^{せかい}の知恵^{ちえ}は、この世^よの外面的^{がいめんでき}な記憶^{きおく}などからする知恵^{ちえ}（学者^{がくしゃ}の知恵^{ちえ}はほとんどこのレベルの知恵^{ちえ}に過ぎない）とスウェーデンボルグは言^いいます）とは根本^{こんぽんてき}的に性質^{せいしつ}もレベルも違^{ちが}うものだから、これも当然^{とうぜん}であろう。未開^{みかい}民族^{みんぞく}や無学^{むがく}だが素直^{すなお}な人間^{にんげん}の霊^{れい}が容易^{ようい}に最上^{さいじょう}の天国^{てんごく}に行^いけたのは、彼^{かれ}らが人間^{にんげん}だった時^{とき}に、よくその内面^{ないめん}を耕^{たがや}していたからだ。その内面^{ないめん}を耕^{たがや}すのに必要^{ひつよう}なのが《善^よき行^{おこな}い》ということだ。これは善^{ぜん}を知^しって行^{こうどう}するということにほかならない。単^{たん}に《信^{しん}》があるだけでは内面^{ないめん}は十分^{じゅうぶん}には耕^{たがや}されない。その《信^{しん}》が意思^{いし}に流^{なが}れ入^いって、《善^よき行^{おこな}い》という行^{こうい}為^いになっ^てて初^{はじ}めて良^よく効^{こう}果^かを發^{はつ}揮^きするのだ。人間^{にんげん}は本来^{ほんらい}



天国^{てんごく}に行けるべき性質^{せいしつ}を誰^{だれ}でも持つているものだ。私^{わたし}はこれを『天界^{てんかい}の種子^{しゆし}』と呼^よんでいる。人間^{にんげん}である時^{とき}にその内^{ない}面^{めん}を深く耕^{たがや}してその種子^{しゆし}を成長^{せいちよう}させることが大事^{だいじ}である」

最後^{さいご}のところは私達^{わたくしたち}が聞^きいている「仏性^{ぶつしょう}の開顕^{かいけん}」ということと同じだと思^{おも}います。天国^{てんごく}や浄土^{じやうど}に行くには、素直^{すなお}にお題目^{だいもく}をお唱^{とな}えし、慈悲^{じひ}・至誠^{まこと}・堪忍^{かんにん}の実行^{じっこう}を日々^{ひび}続^{つづ}けていく以外^{いがい}に道^{みち}はないと思^{おも}います。お互^{たが}いに精進^{しょうじん}いたしましょう。

